



白タイの居住空間であるマイチャウ盆地

トイは家にいなかった

ハノイから一四〇キロ四方にあるマイチャウに、染織物と少数民族観光で有名になった白タイの家がある。観光村の奥手にある高床式のトイの家を、一九九七年以来わたしは何度訪ねたろうか。トイはわたしの訪問を知ると、「おー、マサオ、元気が」と繰り返しながら、わたしの背丈ほどある床からほしこを下りてくる。バイクで急な峠道を越えてきたばかりのわたしは、黒い口ひげを蓄え、人なつこい表情のトイをみると安堵する。

前回トイの家を訪ねてから、二年がたとうか。わたしが友人のヤヌオ氏と着いたとき、はしこの上に姿を見せたのはトイではなく奥さんの二一であった。二一はわれわれが落ち着くのを待つ

て、正座を崩した姿勢でお茶をわれわれにすすめてくれる。ハノイやら日本やら、われわれが語る世間の話に彼女は静かな相づちをうつ。いつぱう、われわれは彼女の村や家族の変化を知る。中学生になる一人息子が勉強と学校が大好きで本ばかり読んでいて心配だと、せいたくにも思える悩みを吐露していた。自慢げでもないそのようすが印象的であった。

観光村の昼と夜

村を訪ねる観光客はふつう、おみやげの手織物を買ったり、ビニラックに行ったりして日中を忙しく過ごし、夜は夜で村が主催している民族舞踊を見て楽しむ。しかし、われわれは二一に夕飯でなにを食べたいかだけ告げると、あとは近所の人たちと会話を楽しむほか、布団と枕をかり二一の家でゴロゴロしていた。

夕餉に、おこわと開扉裏であぶった鶏肉を腹が苦しくなるほど食べると、われわれは散歩に出た。各家の窓辺からの光、舞踊の音楽や歌声が漏れている村から外に踏み出せば、田んぼには闇が垂れこめ、近くの明かりといえはホタルの明滅くらいてある。語らいの音がどこからともなくきこえてくるのは、村の若者たちが橋の欄干やどこかしらで静寂を楽しんでいるからである。

村の中に戻つてくると、モチ米を発酵させた壺酒を売っている家の床下で酒を飲んでいる男たちの中にわれわれを呼び招くものがある。見るとトイであった。酔っぱらっているらしい。つきあえば泥酔は必至だろうから、われわれは適当に笑つてやり過した。

トイはそんなに酒を飲む人だっただけ、とわれわれは首をかしげた。そういえば夕飯の支度の

田んぼに出て野良仕事をする。昼間は床下で販売用の綿織物も織り、そして売る。食事の支度は、トイや七四歳にもなるトイの母親も手伝ってくれるが、ひとつの開扉裏で自分たちの食事と、それとは別メニューの観光客の食事を作るのは楽ではない。しかも夕飯が一段落したら、今度は民族衣装を着飾り、化粧もして民族舞踊への出演である。そのためには、つきつき新しく作られる演目を日々の労働の合間に練習しておくなくてはならない。

トイが酒を飲んでたわむれを言っていたころ、二一はまだ観光客のために踊っていた。しかし、「二一は一日中働いているのに」と彼女に同情し、トイの意気を変えてやるのではなく、わたしには村の男たちの気持ちの変化が気になった。

機織りも舞踊も商いも、多くは女性の手による。つまり、観光収入を作り出しているのは



高床式家屋が立ち並ぶ村のたたずまい



白タイ女性の伝統的衣装



観光村の村人も水田は作り続けている

ほとんど女性である。しかも白タイの家族で財布の紐を握っているのもしばしば女性である。より自給的な生活をしていたときは、男女の労働時間の配分はもっと平等に近かったし、財布は女性でも権威は男性の側にあった。観光業で手にしたお金によつて自給のための生産労働の負担が軽くなると、とくに男性の側の労働負担が減った。しかし同時に男性たちは権威も失ったかもしれない。

村では近年、風紀が乱れたという話を聞く。

女性たちが観光客相手に売春に手を出してHIVが蔓延しているという話は眉唾だとしても、つれづれなるままにヒロインに手を出す男性が増えたとか、夫婦の不和やいさかいがたえないという噂には、さもありなんという気がする。酒を飲みながら手招きしていたトイの姿は、文化の担い手として、家族の柱として誇りを失った男の姿であったのだろうか。あれは一時の気晴らしであったのだと確信できる再会を、わたしは待ち望んでいる。

時にもトイはいなくて、二一からは「遊びに行つた」としかきかなかつた。その晩、トイが帰ってきたのは遅かった。

トイの家は奥まっているので宿泊客は多くない。それでも外国人一人につき、宿泊費と食事代だけで一〇〇〇円くらいの収入が一晩で手に入る。しかも、ふつう織物もお土産に買っていくので、さらに数百円から数千円の収入が加わる。二一に聞いたところ、一九九〇年代後半から観光客がたくさん来るようになって、野菜はほとんど買うようになったし、いまでは米も市場からある程度買うことができる。こうして焼き畑の労働から解放され、森林の不法伐採の必要もなくなったという。二一の家にはすでにテレビとバイクもある。村の中には冷蔵庫までもっている家が二軒以上ある。

それでもハードな二一の日

観光化は村に多大な現金収入をもたらした。しかし、女性の労働は楽になったのだろうか。二一の一日はなかなかハードである。朝は早起きして家畜にえさをやり、たきぎ取りに行くか、



観光村では白タイの手織物だけでなく、モン、サオなど周辺の民族の染織物。近年は中国製絹織物まで売られている

かわりゆく村、かわれない人

見ごろ・食べごろ
人類学

檜永 真佐夫
(かしなが まさお)
民族社会研究部